

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：82619

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14109

研究課題名（和文）フィンランドを事例とした多文化共生のためのミュージアムの教育機能

研究課題名（英文）The social role of museums for multiculturalism, based on the case of Finland

研究代表者

山本 桃子（YAMAMOTO, Momoko）

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・アソシエイトフェロー

研究者番号：20779110

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は「異文化へのアクセス」に着目して多文化共生の観点から社会におけるミュージアムの役割を検証することである。文献調査と併せて現地調査を実施して、フィンランド国立博物館をはじめ国立シネブリュコフ美術館、国立サーミ博物館シーダの教育普及担当学芸員にインタビューを行い、コレクションに関わる当事者と学芸員（研究員）が対話を重ねて展示を作成する事実を明らかにした。また、北欧地域の少数民族サーミ・コレクションの国立博物館（ヘルシンキ）からシーダ（イナリ）への返還のプロセスを例に、当事者と繰り返し対話を重ねることでマイノリティのアイデンティティ尊重と双方の異文化理解が成立する可能性を見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内において年々在留外国人数は増加し、観光のみならず生活のために来日する外国人は増え続けている。2023年4月より改正博物館法が施行されたものの、文化的背景が異なる人びとが交わる場所としてミュージアムが機能しているとは言い難い状況にある。

そのような中で、本研究によってフィンランドの少数民族関連の展示とその返還プロセスを明らかにしたことは、国内のミュージアムで今後どのように多文化共生や異文化理解を展示に反映させていくための重要な示唆となることを確信する。

また、2017年に独立100周年を迎えた同国の各館常設展示をアイデンティティの観点から分析し、ミュージアムにお

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to clarify the role of museums in society from the perspective of multicultural conviviality, focusing on 'access to different cultures', from the Finnish case. I visited the site in October 2022 and interviewed curators in charge of education and extension at the National Museum of Finland, the Ateneum Art Museum, the Design Museum and the Sami Museum SIIDA, and revealed the fact that the people concerned and researchers engage in dialogue. The interviews revealed the fact that the exhibition was created through a process of dialogue between the people involved and the researchers.

As exemplified by the process of returning the Sami collection of the country's ethnic minority from the National Museum to SIIDA, I found that identity and cross-cultural understanding can be reconciled through repeated discussions with the people concerned.

研究分野：博物館教育

キーワード：多文化共生 ミュージアム 博物館教育 フィンランド アイデンティティ ウェルビーイング 異文化理解 ナラティブ

1. 研究開始当初の背景

博物館教育では近年、実物教授 (Object-based learning) が注目されている。その理由は、言葉による知識の伝達ではなく、多様な博物館資料の観察による体験に基づいた学習が可能になるためである。K.Thomas はロンドン大学での教育実践を通じて「資料 (Objects) は様々な視点を提供し、観察者は自由な着眼点を共有することができる」と指摘し、トップダウン的に知識を外から得るのではなく作品の観察による個人の内面的な思索を伴った体験的な学びの重要性を提示した。

さらに、ミュージアムの社会的な教育機能について、ドイツの哲学者ハンナ・アーレントによる公共的空間の定義 (「人びとは行為し語ることのうちで、自らが誰であるかを示し、他に類のないその人のアイデンティティを能動的に顕わに」する) を借りると、ミュージアムは作品や他者との遭遇と対話を通してアイデンティティを含む自らの内面への思考を巡らせる場として位置づけられる。子どもたちに対してミュージアムはどのような学びを提供すべきか、という議題は全日本博物館学会で長年議論がなされ多数の教育実践例が報告されているものの、各館の実践の共有に終始し、複数館を対象とした横断的な教育学的見地からの検証は不十分であると言わざるを得ない。

では、実際にミュージアムでの学びはどのように設計され、実行されているのか。本研究では、ミュージアムにおける多様な文化的学びについて「異文化間リテラシー」と「アイデンティティ形成」の側面から検討するために、以下の諸課題を解明していきたい。

2. 研究の目的

(1) フィンランドを事例として、社会におけるミュージアムの現代的役割の再考

「異文化へのアクセス」に着目して多文化共生の観点から社会におけるミュージアムの役割を検証することである。ウクライナ侵攻やパレスチナ危機をはじめ、世界で難民が増加している現代において、ミュージアムは祖国を離れて暮らざるをえない人々が文化的アイデンティティを形成する場所として、また住民が未知の異文化との出会いの場としての役割を担っている。フィンランドにおいては、ロシアと国境を接している点から過去数年で難民の数が急増しており、そのような状況で国立博物館がどのような常設展示をどのような意図で行っているのかを明らかにする。

(2) 異文化間リテラシーの解明

昨今各国ミュージアム関係者間で協議されている、ポストコロニアリズムのミュージアム展示への実現について、返還する側とされる側との対話を通じた異文化間リテラシーをキーワードに、そのプロセスを解明する。

(3) 各ラーニング・プログラムの多角的な考察

デザイン・ミュージアムや歴史民俗博物館など、フィンランドの各ミュージアムで実施される様々なワークショップを対象に、どのような意図で該当プログラムをデザインしたのか、実施にあたりどのような反応が得られたかという運用過程を含め、ミュージアムの取り組みを立体的に描き出す。

3. 研究の方法

(1) 文献による研究

フィンランドをはじめ、国内外の文化を媒介とした多文化共生や異文化理解の事例について、論文や書籍、国際的な展示や国際芸術祭の図録（報告書）の収集と分析。

(2) 現地フィールドワーク

① 定性的調査（インタビュー）

対象：フィンランドのミュージアムに勤務する教育プログラム担当の学芸員

質問項目：自館の提供するラーニング・プログラムの意図や背景、対象と実態について

② 展示空間の観察、展示写真の分析

常設展示を中心に、展示物、展示のストーリー、キャプションや展示補助ツールの調査

(3) 調査先

(i) フィンランド

国立フィンランド博物館、ヘルシンキ デザイン・ミュージアム、フィンランド写真博物館、国立アテネウム美術館、国立シネブリュコフ美術館（以上、ヘルシンキ）、サーミ博物館 SIIDA（イナリ）

(ii) その他海外

オーストラリア国立海洋博物館、オーストラリア博物館（シドニー）、ケ・ブランリ美術館、ギメ東洋美術館（パリ）

4. 研究成果

本研究を通して、次の3点が明らかになった。

(1) 文化的アイデンティを触発する場としてのミュージアム、その社会的意義

フィンランドのミュージアムでは、誰にでも馴染みのあるカテゴリーで再構成した新たな常設展示からは「人を大切にする」姿勢が垣間見えた。学芸員が館内のみならず社会の様々なコミュニティと連携し、そこでの対話を展示やプログラムに反映させている点が明らかになった。

一例として、フィンランドの国立博物館で2022年からリニューアルされた常設展示は、“What’s Finisshness?” をコンセプトに掲げていた。それは、国籍や民族や年代に関わらずあらゆる人びとにアイデンティを考えるきっかけを提供することを意図した展示であり、これらは学芸員が対話を重ねて国内外の様々なコミュニティと交流しながら作り上げられていた。

(2) 異文化間リテラシーの醸成

フィンランドでは、異なる文化的背景を持つ人びとが互いの文化を尊重して共に生活する社会の実現を目指し、ミュージアム間でもアイデンティを尊重する取り組みがなされていた。

具体例として、フィンランド国立博物館のサーミ（現地少数民族）コレクションが2021年にラップランドのサーミ博物館シーダ（SIIDA）へ返還された。この返還は、両館の学芸員による綿密な連携の結果実現し、返還コレクションの展示については当事者のサーミの人びとも参画していた。専門家によるトップダウンの価値判断ではなく、複数の当事者の見解の積み上げによって展示のコンテクストが作成されていた。

(3) 館外のコミュニティと連携した教育プログラムの実施

フィンランドの多くのミュージアムでは教育（パブリック・プログラム）担当の学芸員が在籍する場合でも、展示のテーマに合わせて積極的な外部団体のワークショップを展開していた。

一例として、現地調査で訪れた国立シネブリュコフ美術館では、日本の桜の季節をテーマにした浮世絵の展示が行われており、現地の日本文化振興の民間団体が折り紙を用いたワークショップを実施していた。このように、エデュケーターを抱える館であっても、企画展の内容に合わせて専門性の高い外部コミュニティと積極的に連携し、文化に出会うための多様なチャンネルを提供する姿勢が示された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 山本桃子	4. 巻 807
2. 論文標題 フィンランドのミュージアムにみる多文化共生	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 月刊社会教育	6. 最初と最後の頁 pp.62-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本桃子、市川靖子、奥本末世	4. 巻 2023年度報告
2. 論文標題 鼎談「美術館におけるアート・コミュニケーションの可能性」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館アート・コミュニケーション2023記録集	6. 最初と最後の頁 pp.32-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 棚橋 沙由理, 白岩, 志康, 山本 桃子	4. 巻 1
2. 論文標題 分野横断型学習としてのオブジェクトベースラーニングのさらなる機能拡張-人びとのウェルビーイングの向上への貢献を目指して-	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 The KeMCo Review（特集：オブジェクト・ベースト・ラーニング）	6. 最初と最後の頁 pp.23-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.60275/kemcoreview.4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 山本桃子	4. 巻 36
2. 論文標題 多文化共生を実現するためのミュージアムの役割 -フィンランドの文化事業と学芸員インタビューから-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田教育評論	6. 最初と最後の頁 pp.185-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 棚橋 沙由理 , 山本 桃子	4. 巻 30
2. 論文標題 オブジェクト介在型学習による分野横断型学習と科学技術コミュニケーション- 学術・文化コモンズとしての大学博物館の機能に着目して -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 科学技術コミュニケーション	6. 最初と最後の頁 pp.17-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本桃子	4. 巻 34
2. 論文標題 対話の場としてのミュージアム - フィンランドのエデュケーショナル・キュレーターに着目して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田教育評論	6. 最初と最後の頁 pp.37-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山本桃子
2. 発表標題 ミュージアムの可能性
3. 学会等名 武蔵野美術大学 × CASIO 「わたしたちの世界を知っている？」アートで出会う多文化共生 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 棚橋 沙由理 , 山本 桃子 , 白岩 志康
2. 発表標題 理工系大学博物館の資源を活用したSTEAM教育としての文理芸融合型オブジェクト介在型学習
3. 学会等名 日本科学教育学会第45回年会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山本桃子
2. 発表標題 多文化共生の視点からみる博物館教育の意義 フィンランドのミュージアムを事例に
3. 学会等名 日本社会教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関